

日本文学科の今

天野, 紀代子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

53

(開始ページ / Start Page)

75

(終了ページ / End Page)

75

(発行年 / Year)

1996-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019875>

通信 ぼりとそ

No. 31

日本文学科の今

天野 紀代子

昨春、信州須坂に「田中本家」の文物を見に行った際、卒業生の上野正勝君（'81年卒。清泉女子大付属高校）に声をかけたら、飛んできて案内してくれた。そして、長野の高校で進路指導している立場から見た東京の大学を、あれこれ話してくれた。法政も入試に動きが始めましたね、と言う。法学部の二科目受験や地方入試のことなのだ。文学部も日本文学科が九七年度から、従来の社会や理科の選択科目の代りに「小論文」でも受験できるようになる。暗記より書く力を重視しての改革を、コース制の導入に伴って実現させることにした。既に始まっているコース制というのは、二年次でゼミに分れる時点での三つの道なのだが、従来の文学研究だけでなく言語のコースを独立させ、新たに詩や小説など創作への道を開いたカリキュラム編成にしたものなのだ。二年生からゼミでの勉強がスタートできるのは大いに違うことですね、などと小布施の栗屋で話したのだった。

「私立大学冬の時代」に向って、法政も全学的な脱皮が緊急課題となっている中、日本文学科も自らの変革を少しずつ遂げていることを、御報告する。

また昨冬には、三十年来年賀状のやりとりだけをしてきた旧友田中三喜さん（'63年卒。兵庫県立三原高校）が突然、母校に立ち寄ってみたいと便りを寄越した。法政から配布される入学案内などで、私が専任になったことを知ったのだ。58年館、学生ホールの「有朋自遠方来、不亦楽乎」の下で、との指定であったが、はて、どの壁面であったか、何時の頃からその文字が消えたのかも気づかずに過ごしてきた。友が遠方よりやって来るといふのに。彼は小原ゼミの卒業生だが、そこで出る話は、小田切、広末、益田といった当時の諸先生方による活気だった。学生たちは「研究」からは程遠かったかも知れないが、その薫りを全身に受けて、それぞれの場に行った、と。世代替りはやむを得ないし、「時代」をぬきにした伝統など意味はないが、そうした日文科の築いてきた学風の核のところは、承継ぎ伝えていくことの大切さを痛感させられる。若返り、変身しつつも、権威に囚われない姿勢と批判精神とには、常に自覚的でありたい。

また卒業生を送り出す季節となった。どうぞ、法政の日文科で学んだことを誇りにしてほしい。（文学部教授）